



# UbiComp/ISWC 2014 および AutomotiveUI 2014 参加報告

## UbiComp/ISWC 2014 について

ISWC は、International Symposium on Wearable Computers の略で、今回 18 回目となる。1 回目は 1997 年にボストンで開催され、UbiComp よりも歴史が長い。2005 年は大阪で開催され、日本からの研究面・運営面での貢献も大きい。元々 IEEE の会議として続いてきたが、この 2, 3 年で IEEE との関係が薄まって現在は ACM の会



UbiComp と ISWC は会議運営はすっかり統合されたが、論文査読やベストペーパー選考は独立して行われ、それぞれ個性を保っている。たとえば、ISWC ではフルペーパーやショートペーパーとして投稿した論文でも場合によってはポスター発表として採択されることがあり、逆に言うと、ポスター発表も論文としての価値を重要視している。ベストペーパー選考について言うと、UbiComp では会期前に選考されているが、ISWC では会期中のプレゼンテーションも含めて評価し、会期終了時に発表された。

本会議は3つのセッションが並行して進められた。セッション名には、Activity, Mobile, Location, Sensing, Security, Homeといった従来からのキーワードに加え、Health, Data Mining, Energyといったキーワードも見られた。たとえば、National Taiwan UniversityのグループによるBioScopeというシステムでは、センサを組み込んだバンドエイド型デバイスでユーザの体温や心拍数などを計測し、スマートフォンに転送されたデータを分析することでユーザの健康管理を行う。このように、スマートフォン上



遠隔参加者のためのテレプレゼンスロボット（撮影：川原圭博氏）

のアプリケーションと周辺デバイスを連携させた研究が多かった。筆者の1人である門村が発表したのも、スマートフォンとセンサ内蔵フォークを連動したものである。

筆者らにとって印象的だったのは、Suitable Technologies社によるBeamという遠隔プレゼンスロボットが会場に導入され、遠隔からの会議参加者がいたことであった。セッション中にマイク前に並んで質問したり、コーヒープレークで友人とおしゃべりしたり、通常の参加者と遜色ない存在感であった。また、UbiComp会期直後にCHI（ACMのHCIに関する国際会議）の投稿締切があったこともあり、“Writing Room for CHI”と書かれた貼紙が貼られた部屋が用意されていたのは洒落が効いていた。

会議の最後には、長年UbiCompの運営でも活躍してきたワシントン大学のGaetano Borriello教授による招待講演があった。大規模なデータに基づくモバイルアプリケーションを開発するための試みが紹介され、会議の幕を閉じた。

## AutomotiveUI 2014 について

筆者の1人である角は、同じ会場で連続開催されたAutomotiveUI 2014にも参加したので、簡単に紹介する。AutomotiveUIはまだ6回目の若い会議で、UbiCompの研究コミュニティから派生して始まった。自動車内のユーザインタフェースに関する会議で、運転に関することはもちろんのこと、運転以外のこと、つまり、カーナビの操作、音楽機器の操作、同乗者とのコミュニケーションのためのユーザインタフェースや、運転者の注意や眠気のモニタリングなども対象となっている。したがって、センサ、ディスプレイ、音声対話、バイオメトリクスなど多くの技術分野の専門家が集まる。その一方で、自動車会社の研究者・技術者も多く集まり、筆者にとっては聞き慣れない自動車設計にかかわる業界指標などの専門用語も飛び交う。

同会場で続けて参加したため、UbiComp/ISWCと



AutomotiveUI 2014の予稿集 USB メモリ

AutomotiveUIを比較してみると色々な面で対照的で興味深かった。参加者は800名強と約200名、セッションは3並列に対してシングルセッションであった。特に印象的だったのは、UbiComp/ISWCは産業界からの参加はまだまだ少なく、研究成果の産業界への展開に苦労している一方で、AutomotiveUIは自動車業界から多くの参加者があり、参加者の半分以上が業界の技術者であった。実際、昼食で一緒になったテーブルに、BMW、ベンツ、フォードなどの自動車会社の技術者が同席していた。普段、こういった同業種他企業の技術者同士が個別に会うことは難しいが、学会は、堂々と情報交換できる貴重な機会なのだそう。業界と学術界の成熟度がちょうどひっくり返っている印象だった。

筆者にとっては、日本にいと会う機会が少ない日本の自動車企業の技術者と、さまざまな話ができたのが有意義だった。その中で、Googleがどんどん自動運転の研究開発を進めている状況を引き合いに出しながら、決められていないことについては（責任を負った上で）基本的にやっても良い、という考え方のアメリカの強さを見せつけられ、そんな中で戦っていく日本企業は大変だと改めて思った。

## UbiComp/ISWC 2015 は大阪開催

UbiComp/ISWC 2015は大阪で開催される。2015年9月7～11日の予定である。General Chairとして名古屋大学の間瀬健二教授が中心となり、準備を始めている。会場は、梅田のグランフロント大阪であり、日頃から、産学連携の展示エリアやハッカソンなどの場が提供されている魅力的なスペースである。UbiComp/ISWC 2015では、通常の学術論文の発表だけでなく、街をあげた近未来のUbiComp, Wearable Computerの体験と実験の場とできればと思っているので、ぜひ、多くの本会員が参加いただけることを願っている。

（角 康之／公立はこだて未来大学、門村亜珠沙／お茶の水女子大学）